

私、頑張るよ

中部中・2 北嶋 千愛

赤、黄、白、紫、色鮮やかな花。綺麗にバランス良く供えられている。どこか悲しく感じるが、会いに来たとこの合図の線香の香り。遠くの木々の音が大音量にしたかのように大きく聞こえる。太陽に照りつけられている石、よく見ると散りばめられた青色のストーンがキラキラと輝く。私は、じっとお墓を見つめる。まだ信じられないな、信じたくないと思う。祖母が亡くなってしまったことを。

「まだー。」と私は母に聞く。「もう少し、もう少し。」私はわくわくしている。なぜなら今日は、祖母の家に行くからだ。毎週末に祖母の家に行くことは、私にとっての一週間のごほうびだ。祖母や祖母と過ごす時間は、あつという間に過ぎてしまう。家に帰る時間になると、また来週会えるのにさみしくて泣けてしまう時もあった。

小学校入学前に、憧れだったランドセルを祖母に買ってもらった。小学校へ行くのがずっと不安だった私は、いつも一緒にいるランドセルが、祖母が見守ってくれているようで学校に楽しく行き、過ごせるようになった。私のランドセルを友達からほめてもらえるとてもうれしく、自慢のランドセルだった。

私は、当たり前の日々が当たり前じゃないことに気づかずにあつという間に年月が過ぎていた。今思い出してみると、元気だった祖母の足がだんだん弱くなり、台所に立つときも椅子に座っていたり、気付けば車の運転をしなくなったり、入退院を繰り返しました。年月がたつにつれて祖母の家にコースロープがつき、バリアフリーに変わっていった。そして、「じいじをよろしくね。」と冗談まじりに私に話していたことを、今となってよく思い出す。

祖母は体調を崩し、病院に入院することになった。病院にお見舞いに祖父、従兄の家族、私の家族でたくさん行った。病院には長い時間ずっと一緒にいられる訳ではないが、祖母との何気ない会話がとても楽しかった。私達は祖母のベッドをみんなで囲み、一緒にご飯を食べた。病院だが、やっぱりみんなで会話しながら一緒にいる時間は最高だ。病院で祖母は口癖のように毎回会う度に私に言った。「早く退院できるように頑張るね。」と。病院にいる祖母が一番辛いのに、常に前向きでいられる祖母は格好良かった。私の自慢の祖母だった。病院から帰ってきて、祖母のいない家でのご飯は会話しているのに何だか寂しくてみんな寂しそうな顔をしている。でも、みんな治ると信じて誰も弱音をはかなかった。私は毎晩、毎晩、神様に願った。一日でも早く祖母が退院できますようにと。

少し年月がたつと祖母は退院することができた。祖母は家に帰って来ても、病院と同じようにベッドにいた。でも、一緒にいる時間が今までと変わらず大好きだった。何か作業することができなくても何気ない、大したことない会話だって私にとって宝物だ。一緒に出かけることができなくなっても、一緒に過ごした時間は楽しかった。バーベキューもした。たこ焼きパーティーもした。とにかくベッドの周りには誰かがいて、にぎやかだった。

祖母はだんだん元気がなくなってしまう、体力が落ちてしまっていた。祖父、従兄の家族、私の家族みんなが祖母の近くにいる時だった。祖母は声をふり絞り、「みんなありがとう。」と言った。そしてその日の夕方、母と祖父の祖母への呼びかけが部屋中に響き渡った。祖母の周りにいるみんなが涙を流していた。それを見た瞬間に嫌な予感が私の頭によぎった。嘘だと信じたかった。だが、祖母は亡くなってしまっていた。その瞬間、何が現実で何が夢なのか分からなくなった。私は、頭の理解が追いつかなかった。私は自分の感情が整理出来ないまま、とにかく泣いた。心の中でずっと繰り返した。嘘だ。嘘だ。自分に言い聞かせていた。次の日の朝になっても、

それは夢じゃなかった。本当だった。昨日のことが頭によぎる。次の日になつても次の日になつても泣けてしまう。辛かった。もつと一緒にいたかつたと何度か思つた。でもその願いは叶わない。それも辛かった。みんなと会つたら、みんな泣いている訳でもないのに、むしろ笑っているのに、その笑顔は無理して笑っているように見えた。そんな祖母が言つた。

「祖母にいつ見られても恥ずかしくないように、祖母が安心できるように過ごさない。」

と。その時から私は変わった。今まで何も考えずに思つたことをしてしまつていたけれど、考えて行動するようにした。祖母に心から喜んでもらえるように天国で安心して見守ってもらえるようにと常に考えるようになった。そして私には夢がたくさんできた。一つ一つ叶えられる努力をしていこう。そう思えたのは辛かつた祖母との別れと母からの言葉のおかげだ。それからそれが我が家のルールのようになった。このルールは家族みんなで決意したことだから今それを守ろうと、みんな頑張っている。

ある日、母と買い物に来た。ふと私は目に入った。全く知らない人だが、おばあちゃんと孫が手をつないで歩いている姿が見えた。その時私は泣きたくなつた。私も祖母とこういうことをしたかつたなどといういろんな感情があふれてきた。きっとこういう感情は今後も繰り返していくだろう。でも、前を向いて頑張ると決めたことだから辛いけれど、後ろを振り向かない。格好良かつた祖母もいつだつて前向きだつた。亡くなつてから年月が何年もたつても悲しかつたり、寂しかつたりする気持ちは変わらない。逆に成長していくにつれて小さかつたから気がつかなかつたことを後から気づく事もあるだろう。今でも、もつとこんなことしておけば良かつたなどか思ひ出すたび次々と出てくる。だが、今までの楽しい思い出はずっと私の中の思い出の宝箱にたくさん詰まっている。一緒に出かけたこと、面白い話をしたこと、一緒に絵を描いたこと、思い出はたくさん

ある。思い出の長さではなく、濃い思い出は誰にも負けない。一生の思い出だ。亡くなつてしまつても祖母のことはずっと忘れない。そして祖母が私にくれた言葉を大事にしよう。「せなちゃんはどうする。」「大丈夫。」「泣き虫の弱い私を救つてくれた言葉。これからもきつと何度もその言葉に救われ、これからも私は祖母と生きていく。今でも私達家族は、祖母の誕生日には祖母の好きなケーキを買つてみんなでお祝いする。」

家族でケーキを食べる時間すら祖母からのプレゼントに感じる。祖母がいるようであれしい。旅行に行く時も祖母の写真を持つていき、ずっとみんなと一緒にいる。写真を見ると祖母がうれしそうに笑っている気がする。いや、きつと笑っている。

私には将来の大きな夢がある。祖母に直接応援してもらふ事はできないけれど、きつと祖母はいつだつて近くにいるくれる。祖母のためにもこれから頑張ろう。「見ててね。ばあば、私頑張るから。」